詩人であること

長田 弘

詩人であること

長田弘

岩波書店

詩人であること

一九八三年八月三〇日　第一刷発行©

定価一九〇〇円

著者　長田弘

発行者　緑川亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋二-五-五
発行所　株式会社　岩波書店
電話 〇三(二六五)四一一一
振替 東京六-二六二四〇

印刷・三秀舎　製本・松岳社

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan

目

次

1 風は物語る……3
2 柘榴、石梨、無花果、青桐……8
3 川について……13
4 ジョン・シルヴァーの最期……18
5 キャッチャーの息子……29
6 ある少年の死……35
7 わたしの戦争……41
8 読むこと……47
9 五重塔……56
10 書くこと……66
11 恥の歌……76
12 死児の歌……83
13 クラーク・ゲーブルの死……89

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

14 顔をあげる……95
15 ムッシュー・アン・リアン……106
16 「われら新鮮な旅人」……118
17 詩というエピグラフィ……128
18 白味噌の雑煮……137
19 あゝ、そうだったのか……147
20 原民喜のガリヴァー旅行記……158
21 巷のオルフェウス……164
22 「メランコリックな怪物」……175
23 一冊の本ということ……182
24 アイオワの玉葱……188
25 漢字はいくつあるか……196
26 径に由って行く……206

27 貧しさへの想像力……214
28 かれのための一杯のスープ……224
29 言葉と国境……235
30 地図に国はない……250
31 アウシュヴィッツ以後……265
32 絶望から、ちっぽけな笊を……281
33 二つの乳房の丘……292
34 一九三九年のフーガ……304
35 ウェストミンスター寺院の詩人……320
36 スペイン市民戦争の戦後……333
37 メキシコのポサダ……340
38 「言葉殺人事件」……351
39 幸福という一語……359

Illustrations: José Guadalupe Posada

詩人であること

1　風は物語る

アンデルセンを読む。ふとして時間ができたようなときは、アンデルセンをひっぱりだして読む。アンデルセンが好きなのは、物語のなかにいつも風が吹いているからだ。本をひらく。どの物語でもいい。読みはじめると、サッと風がながれこんでくる。読んでゆくうちに、風にこころが曝されるようにおもう。冷たい風だ。アンデルセンの物語は、あたたかな暖炉のある室内の物語ではない。つねに吹きさらしの戸外の物語だ。

アンデルセンをはじめて読んだのは、子どものときだ。『マッチ売りの少女』『みにくい家鴨の子』はいうまでもないが、わたしがなにより魅せられたのは『雪の女王』だった。うつくしいものをうつさない鏡のかけらがじぶんの目とじぶんの心臓にはいってしまったために、少年カイは好きな少女ゲルダから引き離されて、雪の女王にこの世界の寒い果て

まで連れ去られていってしまう。わたしにはカイが知らない誰かのようにおもえなかった。

わたしは寒く暗い東北の冬の街の子どもだった。深い盆地の街だ。雪をかぶった火山から吹きおろしてくる風は鋭い刃物のようで、歩くときは風の切ッ先をかわすようにして、身体をまえに傾けて歩いた。街に広い街路ができて、その街路が「平和通り」と名づけられた。敗戦の記憶がまだ新しかったころだ。風が灰色の街の通りを巻くように走りぬけてゆく。だだっぴろい「平和通り」では、きびしい冬の風がことさらにきつくきびしかった。

子どもは風の子だというのは、真実だ。わたしは風のなかを歩くのが好きだった。風に吹かれるようにして歩いてゆけば、どこまでもゆけるような気がした。風は遠くからやってきたのだから、遠くまでゆくことができるのだ。風のなかをどんどん歩いてゆけば、そのまま遠くまでゆくことのできる物語の主人公のようにだってなれそうである。風のなかにいることは、どこかしら物語のなかにいることに似ている。風は子どもにとって一篇の物語なのであり、子どもはその物語の主人公なのである。

アンデルセンを読んでいると、風の街の記憶がよみがえってくる。アンデルセンの物語はつねに暗く悲しいが、物語のたたえる暗さよりも悲しみよりも、わたしはアンデルセンの物語のなかを吹きぬけてゆく風に惹かれた。アンデルセンの物語は、風が語る路上の伝

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

説なのだ。風のなかをどんどん歩いていったものたちの伝説である。そんなふうにわたしは、風にさそわれるようにして、アンデルセンの物語の世界にとらえられてきたのだった（引用はすべて大畑末吉訳による）。

たとえば、ワルレマー・ドーの物語だ。ドーは、世のなかでいちばんよいもの、かがやく黄金をつくりだそうとして、煙と蒸気と燃えさしと灰のほか何一つつくりだせず、栄華につつまれた身をほろぼして、ひっそりと死んでゆく。かつてはすばらしい屋敷の主だったドーがのこしたのは、荒野に立つかかしのようなぼろ小屋だけだ。ドーの墓には鐘一つ鳴らず、誰一人讃美歌をささげなかった。かつてドーという男がいたことを記憶しているのは、風のほかもう誰もいない。

新しい時代が、別の時代がやってきます、とアンデルセンの風はいう。古い国道は囲われた畑にかわり、大事にされていた墓地は往来のはげしい街道になります。——やがては、車をいくつもつらねた蒸気機関車がやってくるでしょう。そして、名まえも場所もわすれられてしまった墓のうえをまっしぐらに走ってゆくでしょう。これがワルレマー・ドーの物語です。あなたがたは他の人たちに、ドーの物語を話してあげてください。できるだけ上手にね。

風はそういうと、くるりと向きをかえて、去っていってしまう。風の語る物語の終わりはいつもおなじだ。ヒュー、ヒュー！　さらば、さらば！　風が語るのは、つねにみずから語ることをしないものらの無名の物語なのだ。ものみなは語られることのない名づけられない物語を生きて、そして死んでゆく。死んだ人はね、とアンデルセンはいう。頭をものいわぬ一冊の本のうえにのせて、誰にもわすれられて眠っているんだよ。

人生は一冊の本だ。風だけが読むことのできる一冊の本だ。風が枝や葉をざわざわさせて吹きぬけてゆく。風の音は、風がものいわぬ本のページをめくってゆく音である。物語を読むとは、そうしたものいわぬ一冊の本を開いて、語られることなく生きられた一コの物語をそこに読むということなのだ。アンデルセンは世界を、一冊の本として読んだ。アンデルセンの物語はどんな物語だろうと、いつだってものいわぬ一冊の本の物語なのである。

アンデルセンの物語をつらぬくものいわぬ一冊の本のあざやかなイメージに、わたしはいつもずっと魅せられてきたとおもう。アンデルセンをとおしてわたしは、はじめて街は一冊の本であり、樹木は一冊の本であり、あらしは一冊の本であり、墓石は一冊の本であり、玩具は一冊の本であることをまなんだのだし、それらのものいわぬ本にしるされてい

る風の言葉を読むことのおもしろさ、たのしさをおぼえたのだ。むずかしさも。

アンデルセンの物語はおとぎ話、童話だけれども、昔のお話ではない。アンデルセン伝を書いたレジナルド・スピンクによれば、アンデルセンは「古きよき日々」という思想を信じなかった。過去に憧れることなしに、あくまでいま、ここの物語を書いた。あだゆめを語ることはしなかった。アンデルセンの物語の終えかたはいつも、そっけないほどに非情だ。「では、これらの物語を聞いたわたしたちは何といえばいいのです?」「これでおしまい！　といえばいいのです」。

わたしに詩のありかを最初におしえてくれたのは、アンデルセンである。この世界はもうすっかり詩にうたいつくされてしまっている。何をいったいぼくは詩にうたいこんだらいいんだ？　嘆く青年に、占いおばあさんはいう。なんのなんの詩のない時代なものかね。溝のふちにのぼるんじゃ。街の通りがみえるだろう。雑踏がみえるだろう。まっすぐゆきなさい！　詩はそこにある。じかに人混みのなかにはいってゆくんじゃ。見る目と、聞く耳をもってな！　それから、心もいっしょに、わすれなさんなよ！

2　柘榴、石梨、無花果、青桐

庭に柘榴の木があった。細くて滑りやすく、しなやかなくせにいじけている木だった。毎年、実をたくさんつけた。高さが屋根まである、柘榴としてはおおきな木だった。成熟して裂けてくると、切れた固い果皮のしたにきれいに組みあった赤い実をのぞかせた。酸っぱいのであまり好まれないが、わたしはその柘榴の実が好きだった。口を真っ赤にして、ツーンとくる実の一粒を歯でたのしんだ。冷たくて、いい味だった。

ある日、講談本だったとおもうのだが、「柘榴割り」という言葉に出会った。橋から河原に墜ちた武士が頭をグサグサにつぶして死んでいるという、そんな話だったとおぼえている。柘榴割りとはよくいったものだとおもったが、それはなんとなく生なましさをかんじさせる言葉だった。それから柘榴の味が変わった。赤い実の赤さが血の赤さのようにかん

じられた。口を真っ赤にして柘榴を噛ることがためらわれた。

ものにあたえられる言葉によって、ものの感受、ものへの感覚が変えられてしまう。言葉がものへのかかわりかたをも変えてしまう。そのことを知った最初の一つが、その「柘榴割り」という言葉だった。柘榴の木も柘榴の実も変わらないままなのだが、「柘榴割り」という言葉を知ったばかりに、わたしの柘榴のイメージは変わってしまった。いまでも柘榴の実をみると、実そのものよりまず「柘榴割り」という常套句を奇妙に生なましくおもいだすのだ。

梨の木もあった。まっすぐ正確に伸びた木だったが、瘠せた木でちいさな貧しい実しかつけなかった。食べてもまずく、種子があり水気もある馬鈴薯みたいな味しかのこらなかった。毎年そうだった。石梨というのだ。そうおしえられたが、石梨の実はどう工夫しても歯が立たなかった。実は固いのに皮が薄く、包丁で皮をむくのはむずかしかった。果物の皮むきの練習のためのような梨だった。

味はまずかったが、石梨というその言葉はうまい言葉だった。石のように固いからそういうのだとおもっていたが、石梨の「石」は石女の「石」とおなじ意味だった。石梨という言葉は梨の種類をあらわす言葉というより、桜桃や林檎の産地だったその地方での特殊

な呼称かもしれない。後になって山にゆくことがおおかったころ、山歩きをしていると、よく賽の河原と称されるガレ場を横切った。すると庭にあった石梨の木をおもいだした。父のために一ツ、母のために一ツ積む「石」もまた、石梨の「石」とおなじ貧しさのイメージの托された石だった。石梨の木はつまらない木だったが、それでも「石」のイメージをわたしのなかにきめてしまったのは、やはりその貧しい石梨の木だった。

無花果の木はたくさんあって、しかもおおきかった。無花果は、色づいた実も好きだが、わたしにとってはその木のイメージのほうがつよい。折れやすい木である。かなり太い枝だとおもっても体重をそのまま懸けようものなら、簡単に折れてしまう。そのかわりたやすく挿し木がきく。枝折れのあと折れくちからとくとくと滲みでてくる白い樹液は、いまも目にあざやかにのこっている。それは掌にうけると、じつに痒かった。

無花果は痒い木だった。とりわけ葉は痒い。創世記には、世界で最初の男と女は「かれらその裸なるを知りすなわち無花果の葉を綴りて裳をつくれり」とあるのだが、世界の最初の繊維製品に、痒い無花果の葉がなぜことさらに択ばれたのか、ふしぎだ。さすがに世界で最初のデザイナー、エホバはすぐさま「皮衣をつくりて」賢明にも無花果の痒い服を斥けるが、それでも創世記を読んで、ほとんどはじめてでてくる植物の固有名詞がなぜ無

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.